

年間第二十三主日

2018.9.9

マルコ 7・31-37

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高神父

今日の福音には、耳が聞こえず舌の回らない一人の人にイエスがなさってくださった奇跡のみわざが語られています。福音書の中には、イエスが行われたこのような奇跡のみわざが数多く語られています。これらのイエスの奇跡のみわざを語る福音を、今のわたしたちはどのように受け止めたらいいのでしょうか。

福音書がわたしたちに示し、わたしたちが信じているキリスト教の信仰においては、イエス・キリストというお方は、福音書に語られているとおりのお方です。イエスは、耳が聞こえず舌の回らない人を、それゆえの悲しみと苦しみの中から、大いなる奇跡の力をもって、ことばが通じ合う世界に連れ出してくださいました。ことばによって通い合う交わりの世界に連れ出してくださいました。わたしたちが信じているイエスというお方はそのようなお方です。今日の福音で、ガリラヤ湖のほとりに戻って来られたイエスを出迎えた人々のように、わたしたちはここに集っています。ここに集うわたしたちは、あのときガリラヤ湖のほとりの集って来た人々の中に立たれたイエスが、このミサの中にわたしたちとともにいてくださることを信じています。ここに集うわたしたちの願いも、あのときの人々の願いと同じです。

互いのことばが通じ合わない悲しみと苦しみをわたしたちも経験しているはずです。ともに生きながらも、互いの思いを結び合わせるはずのことばが失われ、互いに交し合うことばもなく、それぞれの孤独を抱えて生きなければならないつらさを、ここに集っているわたしたちも経験しているかもしれません。ことばが通じ合うことを願いながらも、口にする言葉が互いを傷つけあい、互いの関係を断ち切ってしまう、ことばというものの持つ恐ろしさをわたしたちもしばしば経験しています。そして、それは、先週の福音のみことばが指摘しているように、他ならぬわたしたちの心の中から出てくるのです。そのことに気付かされる時、わたしたちは、ことばが通じ合わない悲しみよりももっと耐え難い、持って行き場のない、居たたまれない思いに責めさいなまれることになるかもしれません。

そんな思いを抱えて、そんな悲しみの中で、ガリラヤ湖のほとりでイエスの周りに集った人々のように、わたしたちもこのミサの中でイエスをお迎えして

います。あのときと同じように、このミサの中でわたしたちの中に来てくださるイエスは、わたしたちの心の中にあるものを知っていてくださるお方です。わたしたちの心のうちにある悲しみと、その悲しみの底にある、わたしたちの本当の願いを知っていてくださるお方です。イエスご自身、わたしたちよりももっともっと深く、わたしたちの悲しみと、その悲しみの底にある真実の願いを、身をもって知っていてくださるからです。

そのようなイエスの思いを知りたければ、先週の福音に語られていたことを思い出してみたらよいかもしれません。自分たちが大切に守り行ってきた昔からの習慣を掟とし、そのようなことだけに固執して、神の掟そのものに心を向けようとしなないファリサイ派の人々に向けられたイエスの厳しく激しい語調を、わたしたちはどのように聴いたでしょうか。口を通して中に入るものが人を汚すのではないという、あまりにもあけすけな語り方を通してイエスが言おうとしておられることは、あのときと同じように、どこまでわたしたちの心の耳に届いたでしょうか。イエスのことばは、あのとき人々の心に届くことはなかったのです。むしろイエスのそのようなことばは、人々の心をますます硬化させ、イエスと彼らの間を結ぶべきことばの通路は閉ざされてしまったのです。そのような人々に対して、人の心の中から出てきて人を汚すとイエスが言われる、数々の悪を投げつけるように列挙して、先週のイエスとファリサイ派の人々、そして弟子たちとの対話は打ち切られていました。

福音書がその後、何をするというのでもない、異郷の地を巡るイエスの放浪の旅を語っているのは、決して意味のないことではありません。イエスはあの旅の中で何を思っておられたのでしょうか。旅の道々イエスの心にはどのような思いが去来していたのでしょうか。

先週の福音と今日の福音との間には、イエスはその旅の道で出会った一人の異国の女性のことだけが語られています。聖書を開いて、日曜日のミサの朗読箇所にはなかったそのエピソードを味わって見ることをお勧めします。自分の娘から悪霊を追い払ってくれるようにしきりに願ったこの異国の女性にイエスが返されたことばはわたしたちを戸惑わせます。わたしたちにはイエスがこの女性の願いを拒否しておられるようしか思えないからです。あのとき、イエスの心にはどのような思いがあって、イエスはあのような態度をとられたのでしょうか。

奇跡を願うだけで、イエスの語ろうとしておられることに心の耳を傾けようとはしない人々に疲れ、ユダヤの地を後にしたイエスは、この異国の地でも同じことが繰り返されることを望まれなかったのかもしれない。けれども、この異国の地でイエスが出会った女性は、それまでの人々とは違っていたのです。彼女はイエスが言われたことを正確に受け止め、その上で、身を低くしてイエ

スに願ひ続けるのです。イエスとこの女性との間には、ことばのやりとりによって開かれる心と心の通いあいが成立しているのです。イエスは彼女との出会いによって力づけられたに違いありません。イエスはこのようなことを望んでおられたからです。イエスがもたらされる神のことばを受け入れることの出来る人を求めておられるからです。

福音書を通して味わうと、イエスとこの異国の女性との出会いのエピソードからは、一つの大きなドラマの中の幕間劇のような印象を受けます。一旦異国の地に身を隠されたイエスは、そこでのこの女性との出会いを経て、再びガリラヤ湖のほとりに姿を現されるのです。今日の福音は再びガリラヤ湖のほとりに戻られたイエスにスポットライトを当てているように感じられます。そしてそのイエスは力に満ちておられます。

耳が聞こえず舌の回らない人の耳に指を差し入れ、つばをつけた指でその人の舌に触れてくださったイエスは、その人の悲しみと苦しみと一体となって、深い息を吹きかけてエツファタとおっしゃってくださったのです。ここに語られていることは、復活されたイエスが弟子たちの真中に立たれて、その復活のいのちの聖霊を弟子たちに吹きかけてくださったことを思い起こさせます。

今日わたしたちが聴いた福音は、十字架の死によって墓の闇の中に姿を隠されたイエスとの復活の出会いを経験した弟子たちの教会の中で語られているのです。今日の福音の中に響くイエスの「エツファタ」という力にみなぎるみことばは、復活のイエスとの出会いにおいて弟子たちの心に届き、弟子たちの心を開いたみことばです。今日の福音は、イエスの復活によって最終的に弟子たち自身が経験したことを前もって語っているのです。そして今日の福音は、イエスの復活によってわたしたちにもたらされていることがどのようなことであるかを語ろうとしているのです。復活されて世の終わりまでわたしたちとともにいてくださるイエスを信じる者たちの集いであるわたしたちのこのミサにおいて、今日もイエスは、「エツファタ」という、あの力強いみことばを響かせてくださっているのです。願わくは、今日もわたしたちのうちに響くこのイエスのみことばが、お互いのことばが通じ合わない悲しみの中に生きるわたしたちの心を、そのみことばの力によって内側から開いてくださることを信じ、願ひ求めたいと思います。